

嫌悪対象者に対する感情の構造

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 金山富貴子

筑波大学心理学系 山本真理子

The structure of interpersonal emotions toward a disliked person¹⁾

Fukiko Kanayama and Mariko Yamamoto (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

This study aims to examine the structure of emotions toward a disliked person. Respondents were 143 undergraduate students who were asked to imagine a particular person who belonged to the same group they disliked and completed a questionnaire concerning their emotions toward that person. The main findings were that the respondents experienced general hate (rejection and dislike), superiority (hatred and pity), and inferiority (inferior and fear) toward the disliked person.

Key words: interpersonal emotions, emotions toward a disliked person, adolescence

我々は、日常生活において様々な他者と相互作用を行う中で、種々の感情を相手に対して持つ。このような、ある特定の人物に対する感情は、対人感情と呼ばれる。対人感情とは、“特定の他者に対する持続的な感情”であり、相手との相互作用の基礎として、相手の行為の知覚、情緒の喚起、欲求の生起、行動に影響を及ぼすものであると定義されている(齊藤, 1990)。対人感情には、好意、嫌悪、尊敬、恐怖など様々なものがあるが、本研究では、特に嫌いな相手に対する感情に着目し、検討を行う。

2者関係間での相互作用を行う相手を嫌いである時、その状況下では、嫌う人と嫌われる人の2者が存在している。本研究では、前者を“嫌悪者”、後者を“嫌悪対象者”と呼ぶ。嫌悪対象者としては、一般的には、自分勝手な人、暗い人、不潔な人、しつこい人などがなりやすい傾向にある(豊田, 1998)。

このような人物に対して感じる感情は日常会話の中などでは、キライ、いや、ムカつく、好かないといった表現が用いられる傾向にあるが、このように表現される感情は、一般的には嫌悪感や嫌悪感情と呼ばれている。

嫌悪感情は、Plutchik (1980) によると、その程度の強さによって、“Disgust”、“Aversion”、“Dislike”、などがあり、福井(1990)によって各々の語に対して順に“嫌悪”、“忌避”、“嫌い”といった訳語が与えられている。Disgust (嫌悪) は、芳しくない人との接触、規範的な基準から逸脱した他者の行為や普通の人々がもつ社会的動機に欠けるような他者の不道徳な行為によって引き起こされ (Rozin, Haidt, & McCauley, 1993)、むかつきを生じさせる感情である (Darwin, 1965)。Aversion (忌避) は、身体内に苦痛を引き起こすもの、さらには精神的に苦痛や葛藤を引き起こす刺激などにさらされた場合に生じ、不快感を生じさせる感情である (青山, 1999)。また、Dislike (嫌い) は、他者によって望ましくない状況がもたらされた場合に、その状況において自分が優位に立てる力がないと思った時に感じられる感情である (Roseman, 1984, 1991)。これらのことから、嫌悪感情はその強弱の程度によって Disgust (嫌

1) Plutchik (1980) によると、嫌悪感情を意味する語には、“Disgust (嫌悪)”、“Aversion (忌避)”、“Dislike (嫌い)”，などがあるが、日常では、嫌悪対象者に対しては“嫌い”という語を用いることが一般的であると考えられたため、本稿では福井 (1990) のあてた訳語にならない“Dislike (嫌い)”という用語を用いる。

悪), Aversion (忌避), Dislike (嫌い) というように表現は異なるが, いずれにおいても嫌悪者自身にとって好ましくない対象に対して感じられる感情であるといえよう. しかしながら, そのような対象に対して感じる感情は, 嫌悪感情だけではない.

対人感情について研究を行った齊藤 (1990) は, McDougal (1908), Woodworth (1938), Plutchik (1962), Ekman (1972), Kemper (1978) など感情に関する文献研究を行うことによって, 対人感情を8つに分類し, 相手に対する好意-嫌悪, 相手と自分との関係の優勢-劣勢という2軸を用いながら8つの対人感情を円環上に位置づけている. この円環図によると, 嫌悪対象者に対しては“嫌悪”の感情傾向を持ち, 嫌悪感, 憎悪感, 屈辱感, 不快感, 困惑, 緊張といった情緒を感じるが, 嫌悪対象者に優勢の感情傾向を持つ場合には“軽蔑”の感情傾向を持ち, 怒り, 嫉妬, 不満などの情緒を感じ, 嫌悪対象者に劣勢の感情傾向を持つ場合には, “恐怖”の感情傾向をもち, 恐怖, 不安, 驚きなどの情緒を感じることが示されている²⁾. 齊藤 (1985, 1990) では, 優勢の感情傾向は“自分の方が優位 (相手が下) の人”に対して持つ感情であり, 劣勢の感情傾向を持つ場合とは“自分の方が劣位 (相手が上) の人”に対して持つ感情であると記されている. このことから, 嫌悪者は嫌悪対象者に対しては嫌悪感情を感じるが, 嫌悪対象者が嫌悪対象者にとって下位の立場関係にある人であれば軽蔑感情を感じ, 上位の立場関係にある人であれば恐怖感情を感じると言えよう.

しかしながら, 齊藤 (1990) の行った分類は, 文献研究に基づく一般的な感情の分類であるため, 齊藤が分類した感情が実際に嫌悪対象者に対して生じるかどうかは明らかではない. また, 齊藤 (1990) が行った実証研究においては, 想起対象者が明確には1名と特定されていないため, 実在する特定の人物を回答者が想起しているかは不明確である. また, 従来の研究には, 特定の嫌悪対象者に対して向けられた感情の構造について検討した研究はそれほどないため, 嫌悪対象者を特定して感情の構造の検討を行う必要がある.

そこで本研究では, 嫌悪対象者を実在の特定の人物とした上で, その人物に対する感情の構造の検討

を行う. その際, 本研究では嫌悪対象者として, 特に, 自分が属している組織と同一の組織に所属している人物で個人的に親しくない人物をとりあげる.

本研究で, 同一組織における嫌悪対象者を扱う理由は, 以下のようなことからである. 我々は日常生活を営む際に, 職場や学校などの社会的な組織に所属しており, その組織の中で各人が様々な他者と課題や役割に基づく相互作用を行っている. 各人のもつ課題や役割はその組織そのものの運営や, 組織に属す他の人々に影響を及ぼしている. したがって組織の中では, 組織や各人が持つ課題や役割を果たすために協調的な関係を形成し, 相互に協力しあうことが重要になると考えられる. しかし, 日常では協調的な関係を結ぶことを容易にするような好意的な感情だけではなく, 協調的な関係を結ぶことを阻害するような嫌いという感情を相互作用の相手に対して抱くこともある. 一般的に, 人は嫌いな人と会話を行うことにストレスを感じ (橋本, 1997), また嫌いな人に対しては親和や協力の欲求や行動傾向が低いことが知られている (齊藤, 1990). そのため, 組織の中に嫌いな人物が存在する場合には, 嫌悪者自身の精神的健康に悪影響を及ぼすのみならず, 周囲の人々にまで悪影響が及ぶ可能性がある. しかし従来の研究では, 社会的な組織の中で生じる嫌悪対象者に対する感情の構造を検討した研究はあまりみられない.

ある人物に対する感情は様々な下位感情から構成されるが, いずれの感情を感じるかによって感情を喚起した際に生起する欲求や行動が異なるため (齊藤, 1990), いずれの感情を喚起するかによって嫌悪対象者に対して行われる行動が異なると考えられる. したがって, 感情の構造を検討し, いずれの感情が強く感じられているのかを検討することは, 感情を喚起した相手に対して行う行動を予測する基礎研究になるであろう.

以上をふまえ, 本研究では, 嫌悪対象者として, 嫌悪者が所属している組織の一員として存在しているそれほど親しくない特定の他者をとりあげ, まず第一にそのような嫌悪対象者に対してもつ感情の構造を検討する. さらに, 第二に, 嫌悪対象者との立場関係の上下によって, 感じる感情が異なるかどうかについて検討を行う.

方 法

本研究では, 以上の目的を検討するために, 次の手順を用いる. まず嫌悪対象者に対する全般的な感情を自由記述によって収集および整理し, 次に予備

2) 齊藤 (1985, 1990) では, 対人感情を, 比較的持続的で情緒を引き起こす基盤となるような感情と, 急激に生じ短時間で終わる比較的強い感情とに区別し, 前者を“感情傾向”, 後者を“情緒”と表記しているため, 引用の際には原著の表記にしたがっている.

調査を行い探索的な因子分析によって項目の精選を行う。最後に本調査を行い、ある特定の組織の一員として存在している他者を嫌いになった場合に感じる感情の構造を確認する。

1. 感情項目の収集と作成

茨城県内の国立大学大学生および大学院生計24名(男性14名,女性10名)を対象に、個別配布による質問紙調査を行った。広汎に感情を収集するため、嫌悪対象者を同一組織に属している人物に絞らず、嫌悪度の程度を指定する方法を用いた。具体的には、調査対象者と同性で“なんとなく嫌いな人”(低嫌悪対象者)、“どうしようもなく嫌いな人”(高嫌悪対象者)、“どうしようもなく嫌いというほどではないが、なんとなくというよりはより強く嫌いな人”(中嫌悪対象者)を各1名ずつ想起してもらい、その中から質問紙内で任意に指定した2名について、感じる感情の自由記述を求めた。収集した285項目の自由記述をKJ法を援用して66項目にまとめた。この66項目の中には肯定的な意味合いの感情がほとんど認められなかったが、嫌悪対象者に対して肯定的な感情を抱く可能性も考えられるため、66項目に含まれていなかった肯定的感情9項目を齊藤(1990)の対人感情項目から追加した。さらに落合(1994)の青年期の生活感情リストを参考に作成した15項目を追加し、計90項目を嫌悪対象者に対する感情項目として作成した。

2. 嫌悪対象者に対する感情の探索的検討

嫌悪対象者を同一組織内における人物に特定し、そのような人物に対して感じる嫌悪感情の構造を探索的に検討することを目的とし、予備調査として以下のような質問紙調査を実施した。

調査対象 茨城県内国立大学大学生209名(男性110名,女性99名)。

調査時期 2001年9月。

調査方法 調査は大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布する集団形式で実施した。

調査内容 質問紙は以下の内容であった。

(1) 嫌悪対象者の特定

次の教示文を用い、同一組織内において実在する嫌悪対象者を1名想起するよう求めた。教示文は本調査と同じものであり、「あなたが、最近、あるいはここ1年くらいの間に会った人のうち、相手との間に何らかの社会的つながり(クラスやサークルやゼミが同じ人や、バイト先の人など)はあるけれども、個人的に親しくなる前に相手を嫌だと思ったため、それ以上関係が深くなっていない、あるいは

積極的に関係を持ちたくない」とあなたが現在思っている同性の人物を、1人だけ思い浮べて下さい」というものであった。想起した嫌悪対象者に関する個別情報として、性、学年、年齢、回答者との関係などについて単一回答形式で回答を求めた。

(2) 嫌悪対象者に対する感情

自由記述調査で収集・作成された前述の90項目に対して、各感情を感じる程度について6件法(“6.非常にそう思う”“5.そう思う”“4.ややそう思う”“3.あまりそう思わない”“2.そう思わない”“1.全くそう思わない”)で回答を求めた。

結果 嫌悪対象者に対する感情90項目について因子分析(主成分分解、プロマックス回転)を行った。スクリー法を用い、因子の解釈可能性と構造の安定性の点から9因子解を採用した。各因子に高い負荷量(.40以上)を示す項目について解釈を行った。命名した因子名と、回転後の各項目の因子負荷量をTable 1に示す。

この予備調査では嫌悪対象者に対する感情の構造を探索的に検討したため、意味の近い項目や嫌悪の原因に相当するような項目などが含まれていた。そのため、項目を精選して再度分析をする必要があると考えられる。そこで、この9因子を構成する項目の中から負荷量が高く、項目どうしの意味が全く同一でないものを5~6項目ずつ抽出し、計43項目を本調査の感情項目として用いた。なお、もどかしさ因子と無関心因子は因子を構成する項目が5項目以下であったため、両因子を構成する項目を全て用いた。

3. 嫌悪対象者に対する感情の確認的検討

予備調査で探索的に検討された同一組織内の嫌悪対象者に対する感情の構造について、確認的な検討を行うため、本調査として以下のような質問紙調査を実施した。

調査対象 茨城県および東京都内の国公立大学大学生177名(男性75名,女性102名)。

調査時期 2001年11月。

調査方法 調査は大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布する集団形式と、筆者の協力者が個別配布し、回収後に所定の封筒に密封してもらったものを個別回収するという2通りの方法で行った。

調査内容 質問紙は以下の内容であった。

(1) 嫌悪対象者の特定

2001年9月に実施した予備調査と全く同様の教示文を用いて、同一組織内における嫌悪対象者を1名想起するよう求めた。嫌悪対象者に関する個別情報として回答を求めた項目内容とその回答形式も予備

Table 1 嫌悪対象者に対する感情の予備調査の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン行列)

	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	f9	平均値	SD		f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	f9	平均値	SD	
f1 拒否感情												f5 憂鬱感情												
54 話しかけないでほしい	.85	-.15	-.03	.06	-.11	-.02	-.04	.01	.15	3.34	1.6	61	考えてしまいくやしい	-.03	.03	.17	.01	.61	.16	-.10	.11	-.12	1.74	1.1
42 話したくない	.81	-.03	.14	.04	-.19	-.03	-.13	-.02	.12	3.82	1.4	76	つらい思いをしている	.01	.30	.30	-.02	.54	.05	.00	.01	-.06	2.32	1.4
68 うっとおしさをを感じる	.79	-.21	-.07	-.02	.08	.14	.04	.12	-.02	3.61	1.5	38	自分が情けなくなる	.01	.06	.12	.17	.52	.37	.05	.00	-.01	1.94	1.2
31 近寄りたくない気持ちを感じる	.72	.26	-.05	.04	-.01	.00	.04	-.13	.08	4.09	1.3	56	憂鬱になる	.24	.31	.13	.12	.50	-.13	.09	-.06	.04	2.54	1.5
53 不愉快な気分になる	.72	.06	-.02	-.02	.06	.04	.03	.01	.15	3.47	1.5	80	焦燥感を感じる	.02	.31	-.05	-.05	.48	.29	.00	.11	-.05	2.30	1.4
28 面倒くささを感じる	.72	.08	-.23	-.03	-.01	-.10	.04	.21	.04	4.08	1.5	3	考えるとかよくなる	-.14	.09	.30	-.13	.45	.46	.09	.01	-.02	1.87	1.2
11 むかつきを感じる	.71	-.10	.13	-.04	.07	.09	.07	-.01	-.17	3.59	1.6	16	劣位感情											
24 会いたくない	.70	.26	.00	.01	.08	-.09	.00	-.22	.03	3.63	1.5	33	うらやましさをを感じる	.07	.03	.05	.22	.12	.74	-.10	-.02	-.04	1.66	1.1
36 関わりたくない	.67	-.05	.05	-.12	.05	-.11	-.02	-.18	.09	4.20	1.2	27	嫉妬を感じる	.03	.08	.18	.15	-.01	.66	-.07	.04	.06	1.74	1.1
48 そばにいるとつかれる	.66	.29	-.24	-.04	-.01	.09	.10	.16	.13	3.98	1.4	14	劣等感を感じる	.10	.19	-.01	.30	.15	.62	-.15	-.11	.10	1.90	1.2
22 生理的に受け付けられない	.62	.01	.00	-.12	.02	.14	.01	-.10	.12	3.72	1.6	16	良い面をうらやましく思う	-.06	.31	-.01	.15	-.06	.60	.01	-.16	-.01	2.25	1.4
30 嫌悪感を感じる	.62	.08	.16	-.05	.01	.12	.13	-.05	.11	3.25	1.6	32	私自身をみじめに感じる	.20	.02	.06	.14	.29	.53	-.05	.08	-.03	1.89	1.3
41 反感を感じる	.59	.06	.39	.02	-.27	.08	-.02	.09	.00	3.38	1.5	45	自己嫌悪を感じる	.18	.10	-.15	.27	.18	.40	.07	.02	.01	2.35	1.4
16 話でて面白くない	.58	-.09	-.25	.08	-.06	.10	.05	.27	.24	3.92	1.6	17	憐憫感情											
9 寝残する	.57	-.06	.17	.03	.10	.02	.25	-.09	.02	2.84	1.5	8	かわいそうに思う	.27	.09	-.21	.13	-.03	-.08	.86	-.18	-.10	2.48	1.5
65 受入れたくない	.57	-.15	.11	.06	.12	.04	.09	.00	.12	3.30	1.5	20	あわれに思う	.19	-.09	.00	.20	.15	-.12	.69	-.07	.03	2.32	1.4
74 見るのいや	.53	-.18	.20	.01	.39	.11	-.04	-.09	-.03	2.49	1.5	15	A を心配になる	-.05	-.03	-.07	.31	-.03	-.02	.54	.05	-.38	1.75	1.1
69 イライラする	.52	-.13	.08	-.06	.35	.07	-.01	.15	-.10	2.84	1.6	13	周りがかわいそう	.20	-.07	.21	.04	.02	.12	.49	-.07	.23	2.57	1.5
79 不愉快になる	.51	.09	.09	-.05	.33	-.07	.13	-.03	-.10	3.15	1.6	83	ずるさを感じる	.13	.07	.39	-.19	-.15	.28	.41	-.01	-.05	2.93	1.7
1 不満を感じる	.48	.01	.17	-.09	.03	-.18	.08	.19	-.24	3.86	1.6	26	むなしさを感じる	.12	.14	.21	.25	.01	-.17	.41	.17	.09	2.23	1.4
89 腹立たしさを感じる	.46	.00	.33	-.20	.02	-.02	-.02	.11	-.27	3.27	1.6	18	もどかしさ											
71 迷惑感を感じる	.44	.04	.15	-.06	.06	-.03	.36	-.01	-.02	3.11	1.7	90	じれったさを感じる	.06	-.03	.16	.05	.18	-.10	-.23	.72	-.02	2.24	1.3
66 邪魔に感じる	.44	-.08	.14	-.09	.27	.08	.10	.13	-.08	3.03	1.5	43	私への態度もどかしい	-.06	.28	.24	.13	.03	-.06	-.17	.57	-.03	2.22	1.3
62 あきれを感じる	.43	-.06	.22	-.13	-.17	-.03	.48	-.02	-.10	3.38	1.7	17	いじらしさを感じる	.04	-.27	-.04	.17	.03	.11	.17	.52	-.21	1.92	1.1
f2 恐怖感情												50 すっきりしない気持ち												
25 威圧感を感じる	-.02	.76	.07	.05	.08	.17	-.01	-.21	.08	2.34	1.5	19	無関心											
6 恐いと思う	-.04	.76	.07	.02	.00	.03	.04	-.17	-.07	2.20	1.4	19	どうでもいいと感じる	.24	-.17	.02	-.06	-.15	.08	.04	.02	.61	4.25	1.5
77 圧迫感を感じる	-.01	.66	-.01	-.04	.39	.01	.05	-.10	.12	3.09	1.6	12	私と関係ないと思う	.30	-.06	-.01	.08	-.11	-.05	-.11	-.08	.57	3.97	1.6
11 傷つけられそうで怖い	.01	.63	.28	-.05	.04	.04	.08	-.18	-.14	1.91	1.3													
51 嫌われてと思うと自信がなくなる	.04	.60	.00	.23	.10	.01	-.17	.08	-.28	1.77	1.2													
23 嫌われたくない	.11	.56	-.04	.23	-.06	.07	-.13	.00	-.36	1.92	1.2													
84 うまくやていけるか不安を感じる	-.25	.55	-.02	-.13	.12	.17	.06	.33	-.05	2.89	1.7													
81 違和感を感じる	.12	.54	-.04	-.09	.02	-.02	.05	.17	.29	4.21	1.5													
18 悪く思われているか不安	.13	.54	-.02	.26	.03	-.02	-.08	.04	-.43	2.01	1.3													
67 どう接したらいいのか困感を感じる	-.04	.50	-.15	-.20	.05	.06	.26	.31	.01	3.71	1.5													
86 そばにいると落ち着かない	-.03	.47	.01	-.18	.45	.09	-.10	.17	.31	3.29	1.5													
34 関係を悲しく思う	.00	.47	.11	.16	.16	-.11	.09	.28	-.20	2.23	1.4													
72 関係がうまくいこう改善したい	-.24	.47	-.14	.02	-.07	.20	.07	.27	-.30	2.57	1.5	25	残余項目											
82 気分が減る	.24	.43	.00	-.07	.46	-.06	.03	.10	-.07	2.87	1.5	28	息苦しさを感じる	.25	.31	.02	.08	.32	-.02	.01	.11	.32	3.26	1.6
78 気分が落ち込む	.17	.41	.04	-.01	.52	-.12	.02	.03	-.27	2.37	1.4	55	落ち着かない	.34	.38	-.04	.00	.22	.08	-.09	.14	.24	3.23	1.4
f3 憎悪感情												5 不可解さを感じる												
60 許せない	.06	-.05	.73	.02	.15	.04	.07	.03	.01	2.13	1.3	4	優越感を感じる	.09	-.09	.26	.34	.01	-.27	.11	.28	.16	2.07	1.2
70 うらみを感じている	-.06	-.04	.71	.06	.39	.06	-.03	-.04	.05	1.86	1.2	49	恥ずかしい人と思う	.33	-.14	.33	.14	-.01	-.02	.32	.06	.12	2.51	1.5
73 怒りを感じる	.12	-.01	.68	.06	.09	-.03	-.10	.16	-.04	2.35	1.4	59	不条理感を感じる	.34	.24	.37	.02	-.14	-.05	.19	.11	.05	3.09	1.8
58 憎しみを感じる	.08	.07	.66	.06	.15	.10	-.02	.09	.04	1.99	1.3	7	いなくなっほしい	.19	.16	.29	-.17	.30	.11	.15	-.07	.05	2.64	1.5
47 敵意を感じる	.19	.04	.62	.03	-.02	.23	-.15	.09	.12	2.56	1.4	44	失望を感じる	.19	.11	.39	.01	.05	-.15	.25	.20	-.09	2.54	1.5
63 不幸になればいいのと思う	.04	-.13	.55	.68	.41	.00	.01	-.03	.01	2.01	1.3	85	思いやりをもってほしい	.03	.27	.38	-.17	.02	.02	.38	-.10	-.11	2.97	1.6
37 思いやりが感じられない	.07	.40	.53	.00	-.15	-.11	-.27	.05	.11	2.90	1.5	75	うれしいと思う	-.14	.34	-.06	.23	.30	.24	.14	-.06	-.18	2.47	1.4
2 傷つきたいと思う	-.06	.01	.49	.02	.43	-.01	.04	-.06	-.07	1.70	1.0	39	距離に寂しさを感じる	-.03	.22	-.01	.37	.02	.19	-.03	.22	-.26	1.67	1.1
f4 非好意感情												因子間相関												
29 感謝を感じる	.07	-.08	-.06	.80	.05	.11	.02	.11	.00	1.63	0.9		f2	-.06										
10 恩を感じる	.03	-.03	-.08	.77	.02	.11	.12	-.05	-.03	1.53	0.9		f3	-.41	-.04									
40 なごやかな気持ちを感じる	-.08	-.10	.12	.75	.01	.10	.06	.02	-.04	1.45	0.8		f4	.18	-.13	-.13								
64 さわやかな気持ちを感じる	-.18	-.02	.13	.70	-.02	-.05	.13	.05	.01	1.39	0.7		f5	-.27	-.07	-.07	-.07							
52 尊敬の気持ちを感じる	.08	.22	-.08	.68	-.03	.04	-.07	-.13	-.12	1.61	0.9		f6	.13	-.26	-.12	-.16	-.09						
46 祝福したい気持ちを感じる	-.06	-.05	.01	.60	-.12	.11	.08	.17	.09	1.70	0.9		f7	-.10	.05	-.19	.02	-.10	-.02					
57 誇りを感じる	-.06	.02	.20	.56	.02	.26	-.01	-.04	.04	1.52	0.9		f8	-.09	-.14	.06	-.13	-.13	-.04	-.29				
35 好意を感じる	-.33	.31	-.03	.49	-.04	.03	.29	.02	.15	1.88	1.0		f9	-.20	.02	.12	.17	-.06	.10	-.08	.05			

Note. 実際の質問項目では“Aさんに話しかけたくない”のように記述したが、Table 1では表が煩雑になるため、感情に関する記述のみを記した。
N=206. 得点範囲は1~6点.

調査と同様であった。

(2) 嫌悪対象者の立場関係

回答者と嫌悪対象者との上下および同輩関係について、“1. 同輩”“2. 先輩”“3. 後輩”“4. 上司”“5. 部下”“6. 先生”“7. その他”の7つの選択肢について単一回答形式で回答を求めた。“7. その他”については具体的な立場関係を自由記述にて回答するよう求めた。

(3) 嫌悪対象者に対する感情

予備調査から抽出した前述の43項目に対して、各感情を感じる程度について6件法（“6. 非常にそう思う”“5. そう思う”“4. ややそう思う”“3. あまりそう思わない”“2. そう思わない”“1. 全くそう思わない”）で回答を求めた。

(4) 好悪程度

嫌悪対象者に対する感情の妥当性を検討するため、“好き”、“嫌い”、“苦手”、“迷惑”の4項目に対して、どの程度そう思うかについて6件法（“6. 非常にそう思う”“5. そう思う”“4. ややそう思う”“3. あまりそう思わない”“2. そう思わない”“1. 全くそう思わない”）で回答を求めた。好きと嫌い以外に苦手と迷惑の項目を用いたのは、苦手感と迷惑感が嫌悪感に関連している可能性が考えられるためである。まず苦手感に関しては、苦手意識の検討（日向野, 1998）において、苦手感と嫌悪感との間に正の相関が示されていたためである。また、迷惑感に関しては、迷惑だと感じられるような人物との相互作用は一般的に不快感や嫌悪感をもたらすことが考えられるためである。しかしながら、嫌悪感と苦手感と迷惑感との関連は十分に検討されているとは言い難いため、妥当性の検討項目として探索的に用いた。

結 果

本調査で回収した177名のデータのうち、回答に不備のあるもの、嫌悪対象者に対して全く否定的な気持ちを持っていないと解釈される者を除く143名のデータを分析の対象とした。なお、否定的な気持ちを全く持っていない者とは、好悪程度を尋ねる質問項目のうち嫌悪対象者に対して否定的な感情を持っていることを示す“嫌い”（嫌悪度），“苦手”（苦手度），“迷惑”（迷惑度）の3項目のいずれかに対して“1. 全くそう思わない”～“3. あまりそう思わない”までのいずれかの回答をし、かつ肯定的な感情を持っていることを示す“好き”（好意度）について“4. ややそう思う”～“6. 非常にそう思う”までのいずれかの回答した者である。

この分析対象者の内訳を嫌悪度別に見ると、嫌悪対象者への嫌悪度が、“1. 全くそう思わない”であった者は2名、“2. そう思わない”は9名、“3. あまりそう思わない”は21名、“4. ややそう思う”は50名、“5. そう思う”は33名、“6. 非常にそう思う”は28名であった。このように、想起された嫌悪対象者の中には、嫌悪感が比較的弱いものも含まれていたが、嫌悪度に1～3のいずれかで回答した32名は、苦手度あるいは迷惑度のいずれあるいは両方に対して4～6点のいずれかの回答を行っていた。

1. 嫌悪対象者に対する感情の構造

(1) 因子構造

嫌悪対象者に対する感情43項目について構造を確認するため、この43項目に対して因子分析を行い（主成分分解、プロマックス回転）、スクリー法により6因子を抽出した。因子分析の結果をTable 2に示す。

各因子に負荷量の高い項目（.40以上）について解釈を行ったところ、各因子は以下のように解釈された。

第1因子は、“Aさんを許せない”“Aさんに対して憎しみを感じる”などの項目に負荷が高く、これらは嫌悪対象者に対する怒りや憎しみを表していると解釈されたことから“憎悪感情”因子と命名された。

第2因子は、“Aさんと話したくない”“私に話し掛けないでほしい”などの項目に負荷が高く、これらは嫌悪対象者と関わりを持ちたくないことを表していると解釈されたことから“拒否感情”因子と命名された。

第3因子は、“Aさんに対して劣等感を感じる”“Aさんに対して嫉妬を感じる”などの項目に負荷が高く、自分が相手よりも劣っている状態を感じている感情であると解釈されたことから“劣位感情”因子と命名された。

第4因子は、“Aさんに対して感謝を感じる”“Aさんに恩を感じる”などの項目に負荷が高く、相手に対する好意的な感情であると解釈された。しかし、この因子を構成する項目はいずれも平均値が低く、標準偏差も大きくないことから、得点の分布が“ほとんど感じない”という方向であると解釈される。そのためこの因子を構成する項目は、逆転項目であり、因子は相手に対して好意的な感情を感じていないことを表していると解釈され、“非好意感情”と命名された。なお、以降の分析では、この第4因子のみ得点を逆転させて分析を行った。

第5因子は、“Aさんのことが心配になる”“Aさ

Table 2 嫌悪対象者に対する感情の本調査の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン行列)

	f1	f2	f3	f4	f5	f6	平均値	SD
憎悪感情								
12 Aさんを許せない	.913	-.055	.023	-.057	.006	.051	2.15	1.4
13 Aさんに対してうらみを感じている	.867	-.041	.070	.164	-.141	.036	1.84	1.2
11 Aさんに対して憎しみを感じる	.857	.012	.028	.058	.028	.072	2.22	1.4
14 Aさんに対して怒りを感じる	.827	-.010	-.076	-.119	.071	.028	2.63	1.6
10 Aさんに対して敵意を感じる	.729	.040	-.005	-.012	-.028	.159	2.56	1.6
35 Aさんに対してずるさを感じる	.501	-.023	-.034	.003	.200	-.082	2.92	1.8
22 Aさんのことをつい考えてしまいやすい	.437	-.141	.281	.100	.261	-.067	1.58	1.0
23 Aさんのせいで私はつらい思いをしている	.411	-.122	.132	.012	.400	.047	2.09	1.3
拒否感情								
04 私に話しかけないでほしい	-.033	.873	-.036	.034	-.004	.083	3.92	1.5
05 Aさんに対してうっとおしさを感じる	-.141	.845	.114	-.062	.165	-.051	4.13	1.5
02 Aさんと話したくない	.002	.821	-.016	-.106	.082	.138	4.31	1.2
01 Aさんに対して近寄りたくない気持ちを感じる	-.069	.767	-.019	-.081	.092	.314	4.60	1.1
03 Aさんの近くにいると不愉快な気分になる	.126	.703	-.001	-.013	.189	.122	4.05	1.4
40 Aさんのことを、どうでもいいと感じる	-.010	.670	.074	-.055	-.070	-.246	4.46	1.4
39 Aさんは私とは関係ないと思う	-.009	.665	.056	-.002	-.101	-.193	4.25	1.6
43 Aさんとの関係がうまくいくよう改善したい	-.137	-.603	-.035	-.041	.386	.291	2.27	1.3
劣位感情								
25 Aさんに対して劣等感を感じる	-.053	.096	.891	-.050	-.092	.098	1.63	1.0
26 Aさんに対して嫉妬を感じる	.003	-.032	.884	-.080	-.025	-.046	1.55	1.0
28 Aさんに対してうらやましさを感じる	.018	-.141	.858	-.046	-.079	-.022	1.53	1.1
29 Aさんの持っている自分ない良い面をうらやましく思う	-.115	-.070	.822	.052	-.084	.038	1.75	1.2
27 Aさんの事を考えると私自身をみじめに感じる	.103	.159	.777	.043	.071	.010	1.56	1.0
20 Aさんのことを考えると自分が情けなくなる	.126	.088	.631	.056	.128	.044	1.72	1.1
24 Aさんの近くにいると焦燥感を感じる	.060	.069	.552	.062	-.011	.235	1.81	1.2
非好意感情								
16 Aさんに対して感謝を感じる	.026	-.024	-.189	.856	.031	.167	1.46	0.9
15 Aさんに恩を感じる	.147	-.075	-.165	.839	-.030	.107	1.55	1.0
18 Aさんに対して尊敬の気持ちを感じる	-.092	-.024	.010	.770	-.039	.190	1.45	0.9
17 Aさんのそばにいるとなごやかな気持ちになる	.023	-.102	.235	.674	-.043	-.144	1.28	0.6
19 Aさんのことを考えるとさわやかな気持ちになる	-.126	-.033	.202	.650	.201	-.099	1.26	0.5
憐憫感情								
32 Aさんのことが心配になる	-.255	-.049	-.017	.177	.689	.080	1.76	1.0
30 Aさんをかわいそうに思う	.347	.108	-.065	.011	.674	-.237	2.47	1.7
34 Aさんに対してむなしさを感じる	.179	.145	-.082	-.001	.643	-.075	2.12	1.4
33 Aさんさんをあわれに思う	.274	.139	-.106	-.012	.639	-.100	2.17	1.4
37 Aさんの自分への態度をもどかしく感じる	-.244	.092	.216	.254	.567	.033	1.78	1.1
38 Aさんに対して何かすっきりしない気持ちを感じる	.237	-.250	.049	-.221	.468	.136	3.17	1.7
31 Aさんの周りにいる人をかわいそうに感じる	.291	.347	-.165	.127	.432	-.058	2.97	1.7
恐怖感情								
08 Aさんから威圧感を感じる	.073	.088	.035	.186	-.194	.837	2.27	1.6
06 Aさんを恐いと思う	.041	-.048	.005	.010	-.087	.809	2.52	1.7
09 Aさんと一緒にいると圧迫感を感じる	.314	.149	.052	.078	-.044	.670	2.78	1.7
42 Aさんにどう接したらいいのか困惑感を感じる	-.217	-.210	-.008	-.109	.396	.642	2.74	1.7
07 Aさんから傷つけられそうで怖い	.274	-.014	.209	-.038	.033	.591	2.07	1.4
残余項目								
21 Aさんのことを考えると憂鬱になる	.337	.026	.260	-.165	.284	.174	2.73	1.5
36 Aさんにいじらしさを感じる	.068	.058	.222	.288	.120	-.177	1.51	0.9
41 Aさんと距離ができて、寂しさを感じる	.080	-.329	.159	.361	.296	-.144	1.37	0.8
因子間相関								
	f1	f2	f3	f4	f5			
		f2	.365					
		f3	.220	-.245				
		f4	-.025	-.386	.288			
		f5	.235	-.027	.234	.169		
		f6	.251	.005	.275	.083	.199	

Note. N=139. 得点の範囲は1～6点.

んをかわいそうに思う”“Aさんに対してむなしさを感じる”などの項目に負荷が高かったことから、相手に対する憐れみの感情であると解釈されたため“憐憫感情”と命名された。

第6因子は、“Aさんから威圧感を感じる”“Aさんを恐いと思う”などの項目に負荷が高く、相手が自分よりも上の立場にあり、相手から威圧感や恐れを感じている感情を表していると解釈されたことから、“恐怖感情”と命名された。

因子ごとに負荷量.40以上の項目について素点を単純加算した後、各因子の項目数で割り、尺度得点を算出した。なお、第4因子は逆転項目と解釈されたため、先述したように各項目の得点を逆転させた上で尺度得点の算出を行った。各尺度の項目数と尺度得点(平均値)、および α 係数をTable 3に示す。この6尺度の α 係数は、.76～.92であり、十分な信頼性があるといえる。

また、それぞれの尺度について尺度得点の平均値を理論的中間値である3.5と比較すると、本研究の回答者は全般的に非好意感情と拒否感情を強く感じていると解釈された。また、憎悪感情、憐憫感情、恐怖感情は弱く感じられており、劣位感情が最も弱く感じられていると解釈された。

また、各感情と嫌悪度、好意度、苦手度、迷惑度との相関をTable 4に示す。嫌悪度との正の相関が認められたのは、憎悪感情、拒否感情、非好意感情、憐憫感情の4つであり、特に憎悪感情と拒否感情が嫌悪度との相関係数が高かった。また、恐怖感情は苦手度と、劣位感情は好意度とのみ弱い正の相関が示された。

(2) 嫌悪対象者に対する感情の特徴

嫌悪対象者に対する感情の特徴について検討するため、各尺度得点について主成分分析を行った。主成分分析の結果をTable 5に示す。また、成分1の負荷量を横軸、成分2の負荷量を縦軸とした2次元平面上に6つの感情を布置した結果をFig. 1に示す。

Fig. 1より、上部(成分2が0.7以上)には拒否と

非好意の感情が布置していた。また、右部(成分1が0.5以上)には憎悪、憐憫、恐怖、劣位の感情が布置しており、これらのうち、成分2の正の方向に憎悪と憐憫、負の方向に恐怖と劣位の感情が布置していた。この主成分の布置から、同一組織内における嫌悪対象者に対する感情は、嫌悪対象者に対する非好意感情と拒否感情からなるまとまり、憎悪感情と憐憫感情からなるまとまり、恐怖感情と劣位感情からなるまとまりの3群にまとまると解釈された。

2. 立場関係の違いによる感情の差異

嫌悪対象者との立場関係によって、嫌悪対象者に対する感情の違いがあるかを検討するため、まず回答者が想起した嫌悪対象者の立場関係の分類を行った。分類の内訳をTable 6に示す。その結果、立場関係の選択肢のうち上司は8名、部下は0名、先生は1名と少なかったため、以降の分析から除外した。

次に、立場関係(先輩、同輩、後輩)×性(男性、女性)×感情(憎悪、拒否、劣位、非好意、憐憫、恐怖)を独立変数、感情の平均値を従属変数とした3要因分散分析をおこなった。なお、立場関係と性は被験者間要因、感情は被験者内要因であった。その結果をTable 7とFig. 2, Fig. 3に示す。

分析の結果、感情の主効果および性別と感情との交互作用に有意差が認められた(順に $F(5, 761) = 257.12, p < .01$; $F(5, 761) = 3.10, p < .05$)。感情の単純主効果を検定した結果、男性においては劣位<憎悪=憐憫<恐怖<拒否<非好意であり($F(5, 605) = 146.72, p < .01$)、女性においては劣位<憎悪=憐憫<恐怖<拒否<非好意であった($F(5, 605) = 113.50, p < .01$)。また、性別の単純主効果を検定した結果、恐怖感情においては有意差が($F(1, 121) = 6.59, p < .05$)、劣位感情においては傾向差が認められ($F(1, 121) = 3.58, p < .10$)、恐怖感情と劣位感情において共に男性よりも女性の方が平均値が高かった。立場関係に関しては主効果も性別および感情との交互作用も認められなかった(順に $F(2, 121) = 0.75,$

Table 3 各感情の項目数、平均値、標準偏差、 α 係数

尺度名	項目数	平均値	SD	α 係数
憎悪感情	8	2.25	1.13	.92
拒否感情	8	4.31	1.07	.91
劣位感情	7	1.65	0.76	.90
非好意感情	5	5.60	0.40	.86
憐憫感情	7	2.35	0.90	.76
恐怖感情	5	2.48	1.61	.85

Table 4 各感情と嫌い、好き、苦手、迷惑との相関係数

	嫌い	好き	苦手	迷惑
憎悪感情	.49***	-.31***	.13	.45***
拒否感情	.61***	-.70***	.13	.52***
劣位感情	-.12	.21*	.05	-.08
非好意感情	.24**	-.34***	-.03	.23**
憐憫感情	.18*	-.06	.10	.39***
恐怖感情	.12	.03	.33***	.04

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

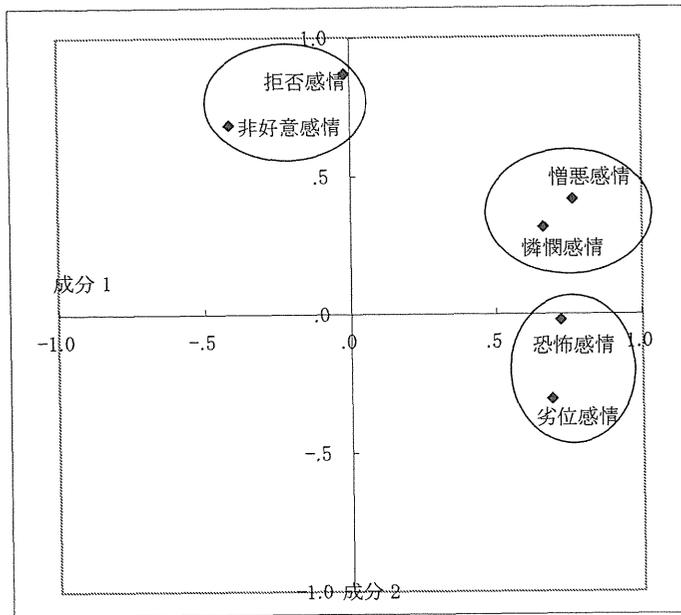


Fig. 1 各感情の主成分分析の結果の布置

Table 5 各感情の主成分分析の結果

	成分1	成分2
憎悪感情	.76	.42
拒否感情	-.02	.87
劣位感情	.69	-.31
非好意感情	-.41	.69
憐憫感情	.66	.32
恐怖感情	.72	-.02
固有値	2.18	1.60
累積寄与率 (%)	36.40	63.05

Table 6 回答者が想起した嫌悪対象者の立場関係の内訳 (人数)

	男性	女性	合計
1 同輩	31	49	80
2 先輩	16	12	28
3 後輩	7	15	22
4 上司	5	3	8
5 部下	0	0	0
6 先生	1	0	1
7 その他・無記入	2	2	4

Note. 回答者から見た嫌悪対象者の立場を示す。なお、回答者が想起した嫌悪対象者は、回答者と同性の人物である。Table 7も同様である。

Table 7 嫌悪対象者の立場関係、性別の各感情の平均値と標準偏差

	先輩		同輩		後輩		全体	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
N =	16	12	29	48	7	15	52	75
憎悪感情	2.33(1.1)	2.65(1.1)	2.44(1.2)	1.97(0.8)	1.60(0.4)	2.31(1.4)	2.13(0.9)	2.31(1.1)
拒否感情	4.64(0.8)	4.20(1.1)	4.34(1.0)	4.09(1.1)	4.36(1.4)	4.54(0.8)	4.45(1.1)	4.28(1.0)
劣位感情	1.55(0.7)	1.92(1.0)	1.59(1.0)	1.69(0.7)	1.23(0.3)	1.86(1.3)	1.46(0.7)	1.82(1.0)
非好意感情	5.53(0.6)	5.32(0.8)	5.70(0.5)	5.54(0.7)	5.77(0.6)	5.85(0.4)	5.67(0.6)	5.57(0.6)
憐憫感情	2.43(0.9)	2.33(0.8)	2.42(1.0)	2.25(1.0)	2.46(1.0)	2.31(0.9)	2.43(1.0)	2.30(0.9)
恐怖感情	2.30(1.1)	3.27(1.1)	2.15(1.1)	2.43(1.2)	1.74(1.0)	2.53(1.5)	2.06(1.1)	2.74(1.3)

Note. ()内は標準偏差を示す。6つの感情に欠損値のあったデータは分析から除外したため、NはTable 6とはやや異なっている。

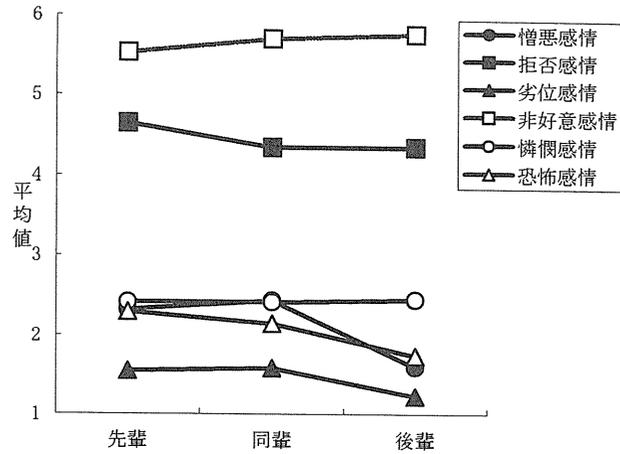


Fig. 2 嫌悪対象者の立場関係別各感情の平均値 (男性回答者の結果)

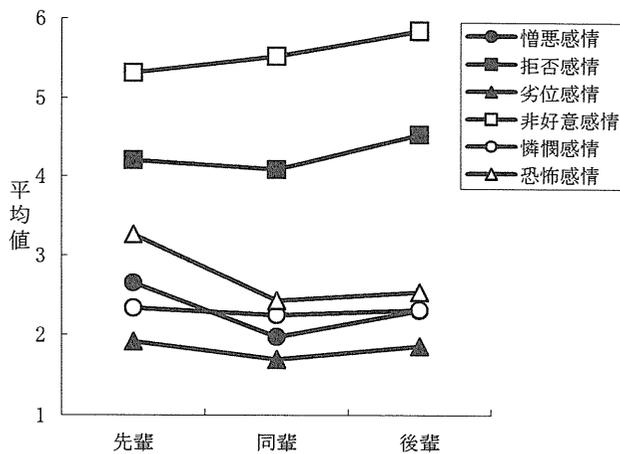


Fig. 3 嫌悪対象者の立場関係別各感情の平均値 (女性回答者の結果)

ns ; $F(2, 121) = 1.40$, ns ; $F(10, 605) = 1.46$, ns).

考 察

1. 嫌悪対象者に対する感情の構造

本研究では、同一組織内に所属する嫌悪対象者に対して持つ感情の構造を検討した。その結果、予備調査で探索的に検討を行ったところ9因子が抽出されたが、本調査で項目の精選を行った上で確認的な検討を行ったところ6因子が抽出された。予備調査と本調査でそれぞれ抽出された因子数が異なるのは、予備調査で因子を構成する項目数の比較的少な

かった第8因子のもどかしさと第9因子の無関心が、それぞれ本調査で憐憫感情と拒否感情へと収斂し、予備調査で示された憂鬱感情が、本調査で憎悪感情と劣位感情に収斂されたためであった。このように、本調査では予備調査で用いた項目を精選して項目作成を行ったところ、予備調査で抽出された因子が本調査の分析において収斂することによって、予備調査で抽出された9因子の中に含まれていた6因子が本調査でも確認された。したがって本研究においては、本調査で示された6つの感情が嫌悪対象者に対する感情であると考えられるであろう。

そこでこの6つの感情と、斎藤(1990)の対人感情の分類との対応を検討すると、まず本研究における拒否感情は斎藤の分類における嫌悪の感情傾向と、憎悪感情は嫌悪や軽蔑の感情傾向全般と、憐憫感情は軽蔑の感情傾向の中の軽蔑感と、恐怖感情は恐怖の感情傾向全般と嫌悪の感情傾向の中の困惑感と、劣位感情は劣位の感情傾向と、それぞれ対応していると考えられる。本研究における非好意感情は、斎藤の分類における好意と尊敬と慈愛の感情傾向とがまとまったものであると考えられる。斎藤の分類において好意、尊敬、慈愛の感情傾向は肯定的な感情であると位置づけられるが、本研究では嫌悪対象者に対する感情を検討したため、肯定的な感情は感じられずに、非好意感情となって表れたものと考えられる。

また、本調査の主成分分析の布置から、6つの感情は3群にまとまることが示された(Fig. 1)。これらを解釈すると、非好意感情と拒否感情から成るまとまりは“一般的感情群”、憎悪感情と憐憫感情から成るまとまりは“優勢感情群”、恐怖感情と劣位感情から成るまとまりは“劣勢感情群”であると解釈された。この構造は、斎藤(1990)が嫌悪者は嫌悪対象者に対しては嫌悪の感情を持つが、自分よりも劣勢な嫌悪対象者には軽蔑の感情を、自分よりも優勢な嫌悪対象者には恐怖の感情をもつと述べていた点とまとまり方が対応していると考えられる。

以上のことから、嫌悪対象者に対する感情は3つの感情群から成る6つの感情でとらえることができると解釈される。このうち、一般的嫌悪感情群である拒否感情と非好意感情は、理論の中間値(3.5点)よりも平均値が高く、非常に強く感じられていたことから、嫌悪対象者に対する感情として中心的な嫌悪感情として位置づくと考えられる。優勢感情群である憎悪感情と憐憫感情は、平均値が低かったが嫌いとの間に正の相関が示されたことから、嫌悪対象者に対する嫌悪感が高い時に強く感じる感情だと考えられる。また、劣勢感情群である劣位感情と恐怖感情に関しては、嫌悪度との相関はなく、恐怖感情は苦手度と、劣位感情は好意度と正の相関が示された。このことから、劣勢感情群の2つの感情に関しては、嫌悪対象者に対して苦手感あるいは好意を持っている時に感じられる感情ではないかと考えられる。

2. 嫌悪対象者との立場関係の違いによる感情の差異

本研究で示された感情は、非好意感情と拒否感情から成る“一般的嫌悪感情群”、憎悪感情と憐憫感

情から成る“優勢感情群”、恐怖感情と劣位感情から成る“劣勢感情群”というまとまりを示していた。このことから、斎藤(1990)が対人感情の円環図で示したように、嫌悪対象者に対して感じる感情は、嫌悪対象者が自分よりも優勢あるいは劣勢な立場関係である場合には異なるのではないかと考えられる。しかしながら、本研究では、嫌悪対象者との立場関係の違いによって、感じられる感情の内容は異ならなかった(Fig. 2, 3)。その原因としては、嫌悪対象者との立場関係を単純に先輩、後輩、上司、部下といった形式的な側面の項目で尋ねたことが考えられる。本調査では上司、部下、先生を想起した回答者が少なかったため、同輩、先輩、後輩の立場のみで分析を行ったが、本研究の回答者は大学生であり、大学生の先輩-後輩関係は所属する組織の上下関係がそれほど厳密ではない可能性がある。今後は、立場関係を形式的な側面のみで分類するのではなく、質的な側面で分類できるような項目を用いた上で感情の差異を検討する必要があると考えられる。

3. 今後の課題

本研究においては、嫌悪対象者に対する感情として6つの感情が示されたが、憎悪感情や憐憫感情といった優勢感情と劣位感情や恐怖感情といった劣勢感情は全般的にそれほど強く感じられていなかった。これらのうち特に、憎悪感情や恐怖感情は、本研究で用いた項目の内容から、他者に対する感情としては否定的な度合いの強い感情であると考えられる。このような否定的な度合いの強い感情は、単に同一組織に属している嫌悪対象者に対しては関係が表面的であるため感じられにくかったのかもしれない。しかし一方で、このような否定的な度合いの強い感情を感じることに社会的望ましさのバイアスがかかり、感情の喚起が抑制された可能性があることも考えられる。また、本研究では嫌悪対象者を想起させる際に、“嫌いな人”という表現ではなく“いやな人”という表現を用いて嫌悪対象者の想起を求めたことも原因の一つとして考えられる。嫌いな人に対しては不愉快な出来事を経験しているため、想起することに精神的負担が多少生じるであろう。そのため、精神的負担があまりかからない人物が想起され、結果として嫌いである度合いが低い人物が想起された可能性がある。しかしながら、本研究の結果からは、憎悪感情や恐怖感情がそれほど感じられていなかった原因が、関係が表面的であったためなのか、社会的望ましさのバイアスや精神的負担を軽減するためなのかは一概に結論を下すことはできな

い。今後の研究では、嫌悪対象者の想起を求める際に、嫌いである度合いの高低を操作したり、感情の項目を社会的望ましきのバイアスをできるだけ低減できるようにするなどの工夫を行う必要があると考えられる。

引用文献

- 青山謙二郎 1999 嫌悪 aversion 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・重柁算男・立花政夫・箱田裕司(編)心理学辞典 有斐閣 Pp. 226.
- Darwin, C.R. 1965 *The expression of the emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1972 *Emotion in the human face*. Pergamon.
- 福井康之 1990 感情の心理学 川島書房.
- 橋本 剛 1997 対人関係が精神的健康に及ぼす影響 — 対人ストレス生起過程因果モデルの検討から — 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 日向野智子・堀毛一也・小口孝司 1998 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 43-62.
- Kemper, T.D. 1978 *A social interactional theory of emotions*. Wiley.
- McDougall, W. 1908 *An introduction to social psychology*. Methuen.
- 落合良行 1994 青年期における生活感情リストの作成 筑波大学心理学研究, 16, 119-128.
- Plutchik, R. 1962 *The emotions: Facts, theories and a new model*. Random House.
- Plutchik, R. 1980 *Emotion—A psychocoevolutionary synthesis*. Harper & Row.
- Roseman, I.J. 1984 Cognitive determinants of emotion: A structural theory. In P. Shaver (Ed.), *Review of personality and social psychology*. Vol. 5. *Emotion, relationships, and Health*. Newbury Park, C.A: Sage. Pp. 11-36.
- Roseman, I.J. 1991 Appraisal determinations of discrete emotions. *Cognition and Emotion*, 5, 161-200.
- Rozin, P., Hadit, J., & McCauley, C.R. 1993 Disgust. In M. Lewis & J.M. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*. New York: Guilford Press. Pp. 575-594.
- 齊藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
- 齊藤 勇 1990 対人感情の心理学 誠信書房.
- 豊田弘司 1998 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要 34, 121-127.
- Woodworth, R.S. 1938 *Experimental psychology*. Holt.
(受稿4月16日: 受理5月21日)